娘牝(むすめ)にされた男
～第一調教 女装メイド主婦と妻の愛人～

娘牝（むすめ）にされた男

～第一調教　女装メイド主婦と妻の愛人～

第一章　主人交代

姫坂　実雄(ひめさか　じつお)はうなだれたまま妻の優里(ゆり)の前に立ち尽くしていた。二年前、優里の父親からの多額の援助を受けて購入したマンションのリビングには、分不相応な調度品が並んでいる。優里は実雄が大事に取って置いたオールドボトルウィスキーをグラスに注ぐと一気に飲み干した。

「あー、まずい。よくこんなの飲めるわね」

優里は普段からビール党で、年代物のウィスキーの味など分かる筈も無い。彼女がそれを承知で実雄に嫌がらせをしているのは明らかだった。

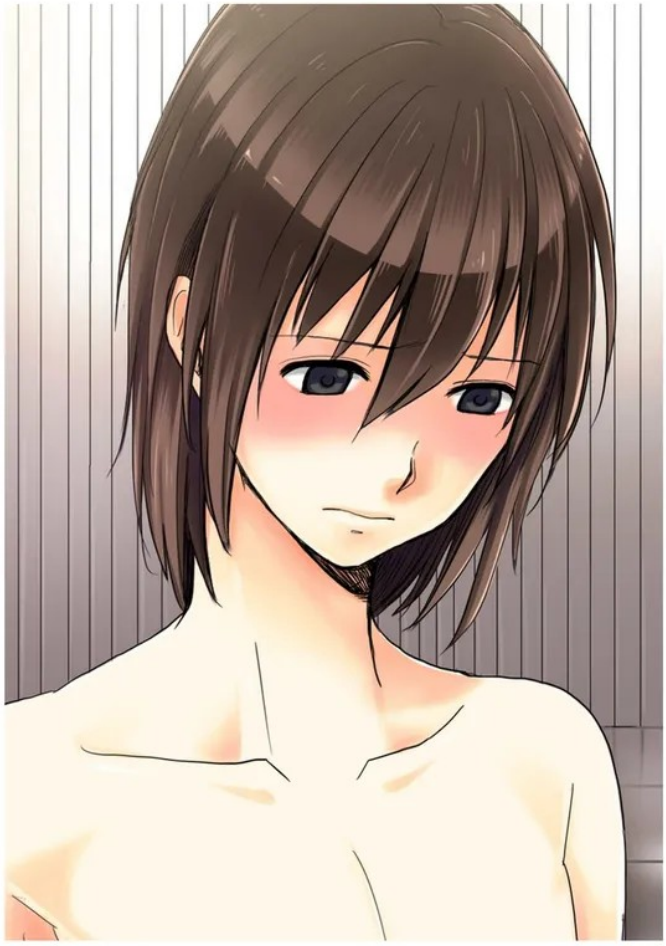
「それでどうするのよ明日から」「し、しばらくは失業保険も出るから・・・」

「只でさえ安月給だったのに、その中からローン払えるの？」「そ、それは・・・」

「まったく、こんなの詐欺じゃない、本当に騙されたわ。一流企業の将来を嘱望される若手社員だって？まさかたった二年で無職の妻になるなんて思わなかったわ」

優里は吐き捨てるように言った。

実雄が三年間勤めた弥生商事を解雇されたのは一週間前の事だった。事由は懲戒解職。通勤中、盗撮の罪で現行犯逮捕された事を考えると刑事処分を受けなかっただけでも幸運だったと言える。



だが身に覚えの無い実雄にとっては災難というしか無かった。必死に冤罪を主張した彼だったが、スマートフォンに確かに記録されていたスカートの中の写真を突きつけられれば、どれだけ否定しても無駄だった。
結果、被害者という女子高生の家族とは数百万の示談金を支払うことで話し合いが成立したのだが、実雄は貯金のほとんどと職を失ったのだった。

「こんな話、格好悪くてパパにも話せないじゃん。次の職も見つかるわけないしさ」
実雄が以前の会社にはコネで入社し、実際には何の能力も無いことを優里はとうに見抜いていた。実雄の入社に手を貸してくれた人物は社内抗争で敗れて既に退社しており、だからこそ今回の件で実雄が簡単に解雇されてしまったということも彼女は十分に承知していたのである。
「まぁ、当面は私が復職するしかないわね」
「ごめん・・・優里・・・」
「謝って済むと思ってるの。私の立場も考えてよね！」
優里は結婚前までは中堅のデザイン会社に勤めていた。専業主婦を望む実雄が半ば強引に退職させた事を、優里は心良からず思っていたのだ。
「本当にごめん・・・」
頭を下げる実雄を優里は冷たい目で見ながら吐き捨てるように言った。

「じゃあ改めて確認しておきましょうか。今日から私がここの家の主人になるってことを」
優里は自分の前に立たせた実雄の臍の辺りを撫でる。
「う、うん・・・」
全裸のまま優里の前に立たされていた実雄は、屈辱を感じながらも黙って妻の話を聞いているしかなかった。
「とりあえず、あなたの持ち物は全て処分するからね。仕事道具はもちろん、趣味のものも全部よ」
「で、でも・・・」
「どうせ再就職なんか出来ないんだから、いらないでしょ。今日からあなたは家の中の事だけを考えてればいいのよ」
「う、うん・・・」
冤罪を着せられ、すっかりと自信を失っている実雄は普段から気の強い妻に逆らう気力はもう無かった。だが優里は実雄が思っていた以上の事を口にした。
「あぁ、もちろん洋服もね。男物は全部処分するから」
「えっ！？じゃ、じゃあ僕は何を着れば・・・」
「ずっとそのままでいいんじゃない？稼ぎも無いんだから」
「そ、そんな・・・」
「冗談よ。世間体もあるからね」

優里は少しだけ微笑むと、恐るべき提案をした。
「じゃあ私のお古を着てなさい。それで十分でしょ」
「ゆ、優里のお古！？」
「そうよ文句ある？」
「だ、だって・・・女ものを着るなんて・・・」
「女みたいな顔して何言ってんのよ」
実雄の顔が怒りと恥辱で赤くなった。
「社内一の美青年って言われてたあんたじゃない、きっと女装も似合うわよ」
優里の言葉は事実だった。結婚前、仕事が出来て美男子という触れ込みだった実雄は確かに女性と見まがうかのような可愛らしい顔立ちをしていた。だがその美貌は認めるものの、一緒に暮らす内に優里はもっと男性的な強さというものを夫に求めていた。
「あんたみたいな『おとこおんな』には女性用の服装で十分よ。ほら、これ丁度捨てようと思ってたから」
優里はクローゼットから一組みの下着を取り出すと実雄に向かって投げつけた。
「こ、これは・・・」
レモンイエローを基調とした生地に胸元のフリルとストラップのリボンが可愛いらしいブラジャー、お揃いのフリルとリボン付きのショーツ。それは新婚時代に優里にねだられて買ったランジェリーのセットだった。

「ずっと裸でいいなら着なくていいけど」
躊躇している実雄に優里が低い声で言う。その響きに冗談とは思えない本気さを実雄は感じ取った。
「女ものの下着を着けるのがそんなに屈辱？あなたって見かけによらずに男尊主義者だもんね、でもこれからは主人は私なのよ。それとも離婚する？」
「そ、それだけは！」
実雄は慌てて優里に縋り付いた。今離婚などされれば多額の慰謝料を取られて、彼は路頭に迷うしかなくなる。望めぬ事かはしれないが、いつか盗撮の冤罪を立証して元の幸せだった夫婦に戻る事だけが彼の願いだった。
「じゃあ着れるわよね。専業主婦の実雄さん？」
小馬鹿にしたような妻の視線を浴びながら実雄は仕方無くショーツに手を伸ばす。
「ふーん、そんな粗末なものでもやっぱり裸は嫌なんだ。」
子供のような短小で、しかも真性包茎の実雄の股間を指さしながら優里が嘲笑する。以前はセックスの時に遠慮がちに冗談交じりに言うだけだったが、もはや実雄のプライドを考えて、遠慮するつもりも無い様だった。

「んふふ、おちんちん小さくてよかったね。女性用ショーツでも十分に収まるじゃん」
すっかりとショーツの中で消沈しているペニスは実雄の心の中を表しているようだった。
「次はブラね。付け方分かるでしょ？」
「で、でもこれは必要ない・・・のでは・・・」
思わず妻に対して丁寧口調で言った実雄に対して、優里はこともなげに言い返す。
「あなた、今日から専業主婦になるんでしょ。なら心構えとしてブラジャーくらいしときなさい。その方が自分がもう主人じゃないって事をいつでも実感できるでしょ」
「で、でも・・・」
男性用のブリーフと基本的には同形態のショーツと違って、ブラジャーは男性に必要のないものだ。普通の男性である実雄にとって、それは女性が着けているのを鑑賞したり脱がしたりするものだ。自身が身に付けるのは恐ろしく抵抗があった。
「まだ分かってないの？今は私が主人なのよ。主人の命令に逆らうの！？」
「は、はい・・・・・」
優里の怒鳴り声に怯えるかのように実雄はブラジャーを手に取った。
「まるで初めてブラをつける小学生の女の子みたいね」
ぎこちない手つきでホックを留める実雄を見ながら、優里は満足そうにグラスを傾けて笑った。

「着、着ました…」
「なかなか似合うじゃない。思った通りよ」
そう言われても実雄は嬉しい筈も無い。ただショーツの中でペニスを縮込ませて妻の視線に耐えるしかなかった。
「どう、少しは専業主婦としての自覚が出来た？」
「は、はい…」
優里の心情を読み取って、実雄は彼女が望む言葉を選ぶしか無かった。
「女ものの下着って気持ちいいでしょ。ほら、鏡見てごらんなさい」
無理矢理姿見を見せられると、確かに少し痩せすぎて胸が無いかもしれないが、美少女といっても差し支えない女性が鏡の中に恥ずかしげに佇んでいた。だがそんな実雄を優里は虐めるように言う。
「あまり自分に見とれないでよ、気持ち悪い。どう？私のお古の下着もらって嬉しい？」
（くっ…くそぉっ…）悔しさを心の中で噛み殺しながら、実雄は仕方無く言った。
「は、はい…優里のお古の下着を着る事ができて…う、嬉しいよ…」
「そっ。じゃあ今日からは私の事は『優里様』って呼んでね。あと普段から敬語で話すように」
屈辱を噛みしめながら、実雄は胸を締め付けるブラの感覚に、自分が本当に優里の召使いになった気分を感じていた。

第二章　女装主婦

翌日から実雄の主婦生活が始まった。
優里は彼を『主夫』ではなくあくまでも『主婦』として扱った。男物の服は全て捨てられた為に日中から寝間着に至るまで優里のお古である女物の服を着ることを余儀なくされ、また態度から言葉遣いに至るまで女性らしく振る舞うように指示されたのだ。
家事はきちんとするから、せめて男扱いしてほしいと何度か懇願した実雄だったが、優里は決して首を縦に振らなかった。
「だって、稼いでいるのは私なのに、あなたが男として威張っているのはおかしいでしょ？」
実雄にしてみれば決して態度を大きくしているつもりは無かったが、以前には確かに何度か収入を得ているのは自分だと偉そうにした記憶もあり、優里にそのように言われれば今の自分の立場と勘案してそれ以上言い返す事も出来なかった。
レズビアンでも、取り立てて男嫌いでもない優里が何故自分を女性として扱おうとしているのか実雄にははなはだ疑問だったが、(冤罪だが)性犯罪で職を失って妻に養ってもらっている状況を考えれば離婚されないだけでもありがたいと思うしかなかった。

早朝に起きて優里の弁当と朝食を作ることから実雄の一日は始まる。
洗濯機を動かしてから優里を起こし、その日の気分を聞いてから洋服を用意する。
テレビやスマートフォンでニュースをチェックしながら朝食を食べる優里に給仕し、着替えとメイクを手伝う。
玄関先にまで鞄を運んで行き、「いってらっしゃいませ」と深々と頭を下げて優里を見送ると、実雄はいつも途轍もなくみじめな気分になった。
初めの頃はやけ酒でも飲んで優里の帰りを待とうかと思ったが、金銭も食材も完璧に管理されている今となっては、とてもそのようにする訳にもいかなかった。
第一、優里が仕事に行っている間に実雄がするべき家事は山ほどある。優里は毎日厳しくその出来具合をチェックするので決して手を抜く訳にもいかなった。
洗濯機が止まればベランダに皺のない様に欲し、優里の高価な下着は洗面所で手洗いをする。実雄が身に付ける女性用の下着も、一緒に洗濯しないように言われているので風呂場の残り湯で洗わなければならない。
全ての部屋の拭き掃除をして掃除機をかけると、大抵は昼過ぎになっている。優里の朝食と弁当の残り物を皿に盛ると、その前に座っている写真に「優里様の稼いでくれたお金で今日も実雄はお昼を食べる事ができます。ありがとうございます」という風な文章をつけて優里にメールしなければならない。

お昼を食べ終わると皿洗いをして夕食の買い出しに出かける。この時だけはユニセックス風のパンツスーツなど、一見して女ものには見えない服装を許されていたが、時折目ざとい女性などにジロジロ見られたり、女子学生にクスクスと笑われたりする事もあり、実雄はいつも肝を冷やして買い物をしなければいけなかった。

家に帰って料理の下ごしらえをして、風呂場とトイレの掃除を行う。この二箇所は特に優里のチェックが厳しいので、各一時間もかけて念入りに磨き上げなければいけない。男性だった頃、便所掃除などしたことのなかった実雄にとってそれは非常に辛くて屈辱的な作業だった。

掃除が終わると今度はベッドメイクを行う。十畳ほどもある寝室のダブルベッドは現在、優里の専用となっていた。実雄は普段はリビングのソファで、優里の機嫌が良い時のみ寝室の床の上で寝ることを許されている。ベランダから乾いたばかりの真っ白なシーツを取り入れて決して皺のないように綺麗に敷き詰める。シーツはおろか、枕カバーも毎日替えなければいけないので実雄の作業量は半端なものでは無かった。

最後にアイロンがけを終えると、優里の帰り時間に合わせて夕食を作る。残業だろうが、飲み会だろうが優里はほとんど予定や連絡を伝えてくれないので、折角作った料理が無駄になることも珍しく無い出来事だった。それどころか、残業して帰ってきた機嫌の悪い優里に「料理が冷めている」と叱責を受けることさえ少ない事では無かった。

「パスタが固いわね。私が柔らかいのが好きなの知ってるでしょ」

そんな生活が一ヶ月も過ぎたその日。夕食はしめじとベーコンの和風パスタにレタスときゅうりのサラダ、パスタに合わせたイタリアンブレッドといったメニューだった。実雄はいつものようにエプロン姿で優里の横に立ったままビールを注ぐ。優里の若い頃着ていたミニ丈のワンピースにワインレッドのフリル付きエプロンをした実雄の姿は使用人の女性にしか見えなかった。

「だいぶその格好もさまになってきたわね」

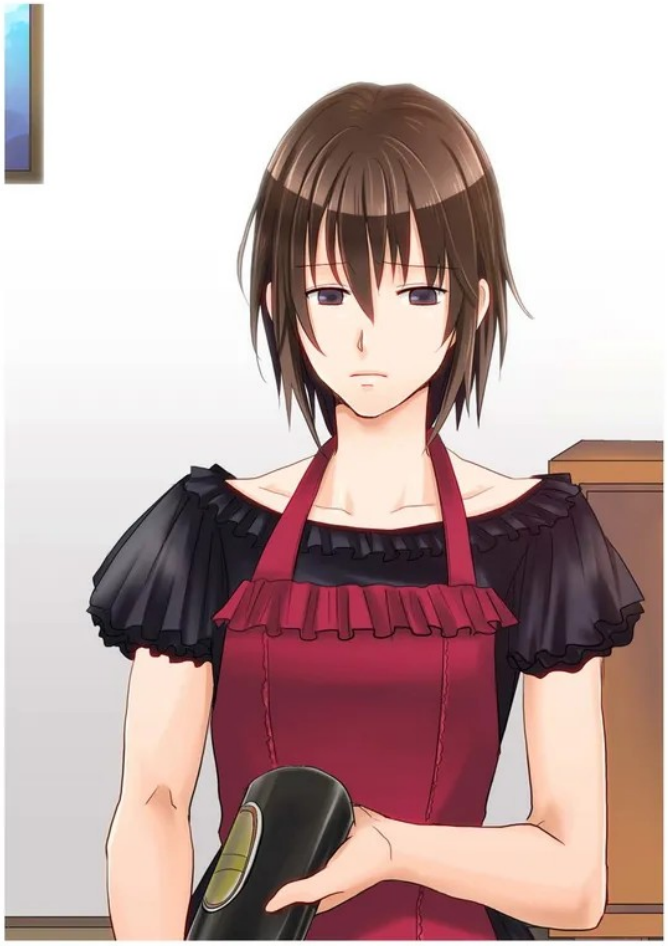
優里は注がれたビールを飲み干すと、おかわりとばかりに実雄に向かってコップを差し出す。実雄は恭しくビール瓶を傾けた。

「随分女の子らしい体つきになったじゃない」

言われて実雄はテーブルに目を落とす。皿の上に大盛りに盛られた優里の分と違い、自分の分はまるで子供か幼児用かと思われるほどしか盛られていなかった。正確にいうと盛ったのは実雄自身なのだが、彼は女らしいスレンダーな身体をつくる為と称して極端なダイエットを命じられていたのだ。

元々痩せすぎだった実雄にその効果は覿面で、特に動物性タンパク質をほとんど与えられない為に筋肉はほとんどこそげ落ちてしまっていた。腰回りも女性のようにくびれ、身長のほとんど変わらない優里の若いときの服もなんなく着る事ができる。実雄にはいまや殴り合いのケンカをしても優里に勝てる自身が無かった。

「はい、お褒め下さってありがとうございます、優里様」



すっかりと実雄はそんな屈辱的な台詞も口にできるようになってしまっていた。特に夕飯時に優里を怒らせると食事を抜きにされる事もしばしばだったから、それも当たり前かもしれない。

「そうそう、今日はあなたに洋服を買ってきたから。いつまでも私のお古ばかりじゃ嫌でしょ？」

実雄は驚いた。ここ最近、優里にそのような自分を気遣う言葉を掛けてもらった記憶が無かったからだ。

「あ、ありがとうございます・・」

警戒しながらも本心から実雄は答えた。わざわざ買ってきてくれたというからには男物の服に違いない。きっと買い物の時に近所の人に見られるのを考えてのことだろうか。

「それから、明日は少し遅くなるから」

更に珍しく優里は明日の予定を実雄に伝えてくれた。明日は何かの記念日だっただろうか、いくら記憶が探っても実雄には心当たりが無い。ひょっとしたらもう自分を許してくれるのかもしれない。淡い期待を抱いて実雄は少し目の前が明るくなった気がした。

「だから、私が帰る時には新しい服に着替えて玄関先で待っていてね」

「はっ、はいっ！かしこまりました！」

まるで従順に主人に仕える犬のように喜び勇んで返事をした実雄だったが、明日からとんでもない事態が待ち受けている事など想像もしていなかった。

第三章　メイド姿での出迎え

翌日、少しだけ浮き浮きとした気分で日中の家事を済ませた実雄は、いつもより豪華な夕食の支度を済ませると、昨日優里からもらった『プレゼント』を開封した。
まず目に入ったのは『お誕生日おめでとう』と書かれたピンク色のカードだった。
「えっ？」
だが実雄の誕生日はまだかなり先だ。彼は少し訝しげに思いながらも、紙箱に詰められた衣服を取り出して絶句した。
「こ、これって・・・」
紺色を基調としたミニ丈のワンピース。フリルのたっぷりついたエプロンとチョーカー、真っ白いニーソックス。そしてレース付きのカチューシャを見れば、いくら実雄が女性の洋服に疎くても、その衣裳が何なのかは想像がついた。
メイド服、それもアニメやコミックに出てくるような幼い少女が身に付けるような、可愛らしいデザインのメイド服だった。
期待していた心が一瞬で絶望に変わる。優里はもう自分を完全に夫扱いどころか、男扱いさえしないつもりなのだ。
しばらくの間茫然自失となっていた実雄だったが、その時まるでその様子を見ているかのように優里からメールが届いた。

『プレゼントは気に入った？気に入らなくても絶対に着ておくように。出来ないなら離婚ね』

ご丁寧にハートマークデコレーションの散りばめられた文面が、返って冗談では無い事を暗に告げていた。

「これを着る…のか…男の僕が…」

実雄はワンピースを手にとって絶望的な気分になった。これまで優里のお古の服を着せられてきたとはいえ、こんなに女らしい、或る意味男性に媚びるような衣裳を着るのはもちろん産まれて初めてだった。そして優里はもちろん、この衣裳を着た自分を本当に使用人、メイド扱いするつもりなのだろう。

だが躊躇っている間にも時間は刻々と過ぎていく。気がつけば優里の帰宅予定まであと三十分しか無かった。実雄は唇を噛みながらその屈辱的な衣裳に身を通した。

スカート丈は思った以上に短く、一体となったペチコートがサーキュラースカートのように可愛らしくその裾を広げる。袖口とチョーカーはまるで拘束具のように実雄の身体を締め付け、装飾としてしかまるで意味の無いカチューシャを頭に着けると、実雄の目から自然に涙が零れた。

ニーソックスを履いて、恐る恐る鏡と対面したその時、チャイムが鳴った。

（しまった、玄関で待っているように言われたのに…）

実雄はスカートをひるがえしながら慌てて部屋を飛び出した。

「ただいま、あらやっぱり似合うじゃ無い」
仕事着の優里は実雄の姿を一瞥して含み笑いを浮かべた。
「お、おかえりなさいませ・・・」
恥ずかしさを押し殺して実雄は頭を下げる。スカートの後ろが大きく捲れ上がり、お尻の部分に風が入り込むのがたまらなく彼を不安にさせた。
「いい子ね、きちんと着替えられたのね」
「は、はい・・・でも・・・」
恥ずかしいといいかけて実雄は口をつぐむ。折角もらった洋服に文句を言おうものなら優里がどれだけ激怒するか分からなかったからだ。だが優里は思ってもいない言葉を吐いた。
「まさか本当に着てるなんて思わなかったわ」
「えっ！？」
「あなたって本当にもう男としてのプライドも無くしちゃったのね。普通の男性なら怒って私に怒鳴ってもいいんじゃない？」
「そ、そんな・・・」
自分を散々脅してきてよく言うものだと思いながらも、実雄は己の不甲斐なさを嘆く。
「まぁ、おかげで私も決心が出来たわ」
優里はそう呟くと、ドアの方に振り向いて、外に向かって声を掛けた。
「和志さん、お待たせぇ」

「えっ？」
実雄が驚く暇も無く、一人の長身の男がドアを大きく開けて玄関に押し入ってきた。
切れ長の目に日本人離れした高い鼻、少し大きすぎるものの男性的な魅力を備えた口元。
誰が見ても美青年と言うであろうその客は遠慮も無くずかずかと二人の前に歩みを進めた。
「初めまして、ご主人。優里さんの上司の夏城（なつき）と申します」
男は口の端に余裕の笑みを浮かべてそう言った。
「な、な・・・ど、どうして・・・」
あまりの状況に足を振るわせ、満足に話すことも出来ない実雄をちらりと見やると、優里は男の背中に手をあてた。
「こちら、職場の上司の和志（かずし）さん。あなたより若いけどもう取締役なのよ。仕事もすっごくできるからいつもお世話になってるの」
「いやいや、優里さんこそ、私の部下には欠かせない存在だよ」
一体何が起こっているのか実雄は混乱した。
「ご主人の噂はかねがね聞いてますよ。よく出来た主婦なんですってね。その制服もとてもお似合いだ」
そこまで言われてようやく実雄は自分のしている格好を思い出した。優里が男性を連れてきたというショックだけでなく、自分は今他人に決して見せることの出来ないような姿をしているのではないか。

「ほら、あなたもご挨拶なさい。私が恥をかくでしょ」
「あ、あの・・・初めまして・・・いつも優里がお世話に・・・なってます」
促されて実雄は狼狽しながらもようやくそれだけを口にした。
「優里様でしょ！」
「は、はい！優里様がお世話になっております・・・」
反射的にそう言った実雄を見て和志は声を出して笑った。
「ははは、噂通りきちんと躾けられているじゃないですか。しかし、本当に男なんですか？それも戸籍上の夫とはとても見えない」
「確認してみます？」
優里は和志に向かって最近見せたことの無い優しい表情で微笑むと、実雄に向かってあらぬことを命令した。
「実雄、スカートを捲りなさい」
「えぇっ！？」
あまりの命令に実雄は困惑した。いくらなんでも初対面の男の前でそんな事をできる筈が無い。しかも実雄がスカートの中に穿いているのは優里のお古のショーツなのだ。
「早く！私に恥をかかせたいの！」
躊躇している実雄をよそに優里は彼を急かす。
「私に恥をかかせたいの！？それともやっぱり一人になりたいのかしら」
「で、でも・・・」
「いい加減になさい。あんた男でしょ。男の癖に男にパンツを見られるのがそんなに恥ずかしいの？そう、やっぱりあんたってオカマだったのね。乙女心の持ち主じゃ、とてもこんな格好いい男性の前でパンツなんて見せられないもんねぇ。じゃあ仕方無いわ、和志さんどこか二人きりでレストランでも行きましょうか」
「ま、待って！」
そこまで言われては仕方無かった。
「どうしたの？」
「め、捲ります・・・」
「そう？私は無理にとは言ってないのよ」
「捲りますから・・・」
「なんか偉そうねぇ。別に私たちはあなたの汚いパンツなんて見たくないんだけど。二人でどっか行くから一人で露出してれば？」
「で、でも・・・」
あまりの物言いに怒りを感じながらも、実雄は下手に出るしか無かった。しばらく躊躇してから彼は屈辱的な言葉を口にした。

「み、見て下さい・・・」
「何をかしら？」
「パ、パンツを・・・」
「違うでしょ。もっと詳しく！」
「ぼ、僕のパンツを見て・・・そ、その・・・」
「はっきりいいなさい！」
「ぼ、僕が男かどうか確かめて下さい！」
実雄は破れかぶれに叫ぶように言った。
「もっと丁寧に頼んでくれるかしら。詳しくね」
実雄は顔を真っ赤にしながらも必死に優里の満足する言葉を考える。
「ぼ、僕にス、スカートを捲らせて下さい、そ、それで、それでショ、ショーツを見て、お、男である事を確認して下さい・・・」
「あはは。ショーツだって、可愛いもの穿いてるのね」
実雄の顔が段々と赤く染まっていく。
「仕方ないわね、じゃあ早く見せてみなさい」
「は、はい・・・」
ここまで来ればもう逃げ出す訳にもいかなかった。実雄はスカートの裾のフリルに手を掛けると、ゆっくりとそれも捲っていった。

「なるほど本当だ。わずかながら男性のものが見えますね」
黙って二人の様子を伺っていた和志が実雄の股間を見て笑う。
「えぇ、お恥ずかしいくらい短小ですから分かりにくいとは思いますけど、一応これでもついてるんですよ」
あまりの二人の物言いにも実雄は反論の一つも出来なかった。
「下着まで女物を穿かされてるんですね」
「えぇ、私のお古なんです」
「そういえばその下着には見覚えがある」
驚愕すべき言葉を和志は口にしたが、その時の実雄にはその意味がよく理解出来なかった。
「いい格好ね。あなた今、メイド服姿でスカート捲って同性にパンツを見せつけてるのよ」
優里がからかうように和志の耳元に囁くと、彼の顔が耳まで赤くなった。
「では短小のメイドさん、そろそろ客である私を案内してもらおうか」
「えっ！？あっ、そのっ・・・」
「実雄っ！和志さんは私の上司だって言ってるでしょ。失礼があったらどうするの！」
「は、はいっ！どうぞこちらへ！」
予想していた事とはいえ、見知らぬ男を自分の家に上げる、それも自分がこんな姿をしている時にという状況に実雄はこれが悪夢であってほしいと懸命に念じていた。
だがこれは紛れもない現実である事を、数十分後に彼は思い知るのだった。

第四章　メイドの誓い

「今日伺ったのは他でもありません。優里さんの事で少し相談がありまして」
和志は丁寧な口調とは裏腹に、リビングのソファに大股を開いて座った。当然のように優里がその隣に座る。
「は、はい・・・」
これから何が起きるのか全く理解出来ていない実雄は黙ってその前に立ち尽くす。その姿はまるで、ご主人夫婦の叱責を受ける新米メイドの様だった。
「この不景気の折り、我が社でも人員の削減計画がありましてね、実は優里さんがその候補に挙がってるんですよ」
低いがよく通る声で和志は語る。
「しかし聞けば、現在この家庭は優里さんの収入のみで支えているそうじゃありませんか。取締役の私としては一度決まった会社の方針を曲げる事は出来ませんが、あまりにも無慈悲だと思いましてね」
「和志さん、優しいから」
優里はそう言って、和志の胸にもたれ掛かった。
「ちょ、ちょっと優里・・・様・・・」
さすがに実雄がそう口にした瞬間、待っていたように優里が怒鳴った。
「なによ！今そんな事言える状態じゃないでしょ！あんた、私たちの立場分かってるの！？」
「そ、それは・・・」
そう言われては実雄には反論する術が無かった。だが愛する妻が目の前で見知らぬ男といちゃついているのだ。夫としては黙っている訳にもいかなかった。
「そ、その・・・夏城さん・・・でしたっけ・・・妻とはどういう関係で・・・」
やっとの事、そう口にした実雄だったが、和志は全く意に介さない様だった。
「それでですね、宜しければ私の口添えで優里さんには会社に残って頂こうかと思うのですよ」
「そ、それはどうも・・・」
「だが社の方針である以上、何か大義名分が無ければ困るのです。それで、優里を私の秘書にしようかと思いましてね」
突如妻の名を呼び捨てにされ、実雄は狼狽した。
「そ、それはもちろん結構ですが・・・」
和志は実雄の反応を見てニヤリと笑った。
「しかし秘書と言ってもいろいろある。優里には私の身の回りの世話のすべてをやっても

らおうかと思ってね」
既に当初の丁寧な口調は消えていた。和志は脚を組んで実雄を冷めた目で見る。
「そのためには今まで通り、あなたの妻という立場では支障が生じると思うんだよ。優里は俺だけのものにしたいんでね」
「ちょ、ちょっと！」
和志の言いぐさに実雄は慌てて叫んだ。
「ゆ、優里・・・優里様は・・・私の妻です・・・今はこんな状態ですけど、そ、そんな・・・いくらなんでも・・・なあ・・・優里」
そう言って優里の方を見た実雄は愕然とした。優里は黙って汚い物でも見るような目で実雄の方を見返したのだった。
「おわかりでしょう。優里さんはもう私のものなんですよ」
勝ち誇ったように和志が言ったその言葉が実雄の頭の中で響いた。
「そういう訳なんで、これから優里は俺の愛人の一人にしてやる。そうだな、三日に一回くらいは可愛がりにきてやるよ。その時は旦那さん・・・実雄だっけ？はメイドとして今日みたいに奉仕してくれよ」
「あら、そんなに少ししか来てくれないの？」
優里がしなをつくる。
「心配すんなよ、今はお前が一番だからな」

「もう、和志ったらもてるから仕方ないけど…」
自分を無視して繰り広げられる二人の会話に実雄は、震えながらも口を挟んだ。
「じゃ、じゃあ離婚…せめて離婚してくれ…」
「はぁっ？」
優里は呆れたようにそう返した。
「あんたね、自分の置かれた状況分かってるの？今離婚してあげるなら、私死ぬほどの慰謝料請求するからね。もちろんこの家の権利も財産も全部もらうわよ」
「そ、そんな…」
「まぁ、当然だろうね」
和志が代弁する様に言う。
「実雄が職を失ったのは、性犯罪がらみなんだろ？それじゃあ家裁は当然ながら優里の肩を持つだろうね」
「し、しかし、妻の浮気も原因…」
「何言ってるの。これは浮気じゃなくて『業務上の都合』でしょ。取締役の和志さんと無職で前科持ちのあんたではどっちが信用されるかしら？」
「く、くっ…」
実雄は悔しさに拳を握り締めた。確かに今離婚調停にでもなれば、もう自分は莫大な借金を背負って路頭に迷うしかなくなるだろう。
「それに、私だってパパの手前や世間体もあるって何度も言ってるでしょ。分かったら黙ってあんたは私達の使用人になればいいのよ」
「し、使用人…」
「その格好似合ってるわよ。いい子にしてたら、今まで通り私の稼ぎで食べさせてあげるわ。ねぇ、和志さん」
「そうだな。まぁたまにはそういう趣向も悪くは無いだろう」
和志はまんざらでもないという風に頷いた。
「じゃあ早速挨拶してもらおうか。実雄が俺たちのメイドになるって記念にな」
「えぇっ！？」
いつのまにかあらぬ方向に話が進んでいた。戸惑う実雄に対し、和志は決定的な事実を告げた。
「実雄さぁ、お前が被害者に払った示談金、誰が出したと思ってんの？」
「そ、それは…僕と優里が…」
「ホントに幸せな男だな。お前の家にそんな貯金があったと思ってたのか？」
実雄は慌てて優里の方を見た。優里は相変わらず冷たい目で彼を見たまま、口だけで笑みを作った。

「あのお金の半分は和志さんに借りたのよ。だってうちに貯金なんてほとんど無かったから」
「そ、そんな…」
家計をずっと管理していたのは優里だ。恐らくかねてからの浪費癖で貯金を使い切ってしまっていたのだろう。
「そういう訳でね、あんた達には借金もあるんだよ。ただし、優里が俺の愛人になるなら、その件は無かった事にしてやってもいい。どうだい、ご主人？」
今更優里の散財を責めても仕方無かった。急に大金が必要になる原因を作ったのは実雄に違いないのだ。
「では改めて聞かせてもらおうか。実雄は俺たちのメイドになりたいんだよな？」
身体全部の力が抜けたようになり、実雄はその場に膝をついた。
「し、仕方無い…やれば…やればいいんだろ…」
「おいおい、俺は頼んでしてもらいたい訳じゃないんだぞ。なんなら優里をソープに紹介してやろうか？」
「そ、そんな！」
まだ妻を愛している実雄にとってその言葉は、これ以上無いくらいの脅迫だった。
「し、します…させて下さい…」
「何を？」
和志は意地悪く問う。
「し、使用人です…」
「違うだろ」
「そ、その…メ…メイド…メイドになります…」
「うぅん、全然誠意が感じられないな。どうだ優里？」
「そうね、こんな生意気なメイドなんて私いらないわ」
優里はそう言って、和志に抱きついた。胸を締め付けられるような苦しみを感じる実雄に対して和志が命令する。
「折角膝をついたんだ。土下座でもしてもらおうかな。それで心を込めて頼んでみてくれよ。そしたら俺たちもその気になれるかもよ」
「ど、土下座…」
「嫌なのか？そんな思いで、俺たちのメイドになる気か？」
「わ、分かりました…」
実雄は仕方無く床に正座すると、ソファに座った妻とその愛人を見上げた。ただそれだけで立っていた時とは明らかに立場が違ったように思える。
「ほら、早くしろよ」

それでも躊躇している実雄に対し、和志が急かす。屈辱を感じながらも実雄はゆっくりと床に手をついて頭を下げた。
「こ、これから、二人の、メ･･･メイドにして下さい･･･」
「全然だな。もっと頭を床につけろよ」
和志が実雄の後頭部を踏みつけた。額がカーペットに食い込む。
「どう、どうか僕を、お二人様のメイドに、し、して下さいませ･･･」
「声が小さい！」
「どうか僕を、お二人様のメイドにして下さいませ！」
やけくそ気味に叫んだ実雄の頭を和志が再び踏みつける。
「何、お前ふざけてんの？そんなに夫婦揃って路頭に迷いたいのか？」
「い、いえ･･･」
頭を踏みつけられたまま実雄は謝るしか無い。
「ならもっときちんと挨拶しろ。自己紹介からな。お前の悪い頭で俺たちが満足する挨拶を一生懸命考えてみろよ」
「は、はい･･･」
気を失うほどの恥辱に塗れながら、実雄は必死に言葉を探す。もう恥も外聞も無かった。
「夏城様、優里様･･･わ、私は･･･ひ、姫坂実雄と申します･･･」
頭上でクスクスと笑う声が聞こえる。

「こ、この度は私をメイド候補に選んで下さって、あ、ありがとうございます・・・」
実雄の目から自然に涙が零れた。
「ふ、ふつつかな私ですが、お二人の為に一生懸命、ほ・・・奉仕させて頂きます・・・ので・・・ど、どうか・・・わ、私に・・・メイドとして・・・仕えさせて下さいませ・・・」
「そうなの、そんなにメイドになりたいんだぁ」
「は、はいっ！」
「あなたがそこまで変態だったなんてね。元妻とその愛人の男性のメイドに？男の癖になりたいですって？どこまで男のプライドを捨てたらそんな発想が出てくるのかしら。ねぇ和志さん」
「全くだ。こんな奴が一時とはいえ優里の旦那だったなんて反吐が出る」
勝手にやらせておいて理不尽きわまりない二人の言葉だったが、実雄は顔を伏せたまま上げる事さえ許され無かった。
「だが仕方無いな。お前に死なれでもしたら俺たちも寝覚めが悪いからな。だが今の誓いを忘れずに死ぬ気で俺たちに奉仕するんだぞ」
「は、はいぃ・・・かしこまりました・・・」
既にそれが現実がどうかさえ分からなくなり始めた実雄は、メイド服のスカートの裾からショーツを丸見えにさせながら、二人のご主人様の前にずっと土下座を続けていた。

第五章　同性のペニス

「それじゃあ、今の誓いが本当なのか試験してやろう」
「えっ！？」
「まだ合格だと言った覚えは無いぞ。お前だってメイドとしてきちんと役に立ちたいだろう？」
「は、はい・・・」
そう答えるしかない実雄だったが、一体和志が何をさせるつもりなのか見当も付かなかった。
「頑張ってね実雄ちゃん」
だが優里はこれから何が起こるのか分かっている風に実雄の頭に手をやる。
「カチューシャ曲がってるわよ。メイドは身だしなみからね」
「は、はい、すみません・・・」
「んふふ、もうすっかりメイド気分じゃないの。そんなにメイドさんに憧れていたのね」
そう言われ、赤面する実雄に対し、和志は自分目の前に座るように命じた。
「よし、いい子だ」
目の前に這っていった和志を見下ろすと、和志は何故かズボンのジッパーに手を掛けた。
実雄の頭に嫌な想像が浮かぶ。

「じゃあ、しゃぶってもらおうか」
目の前に差し出された半ば勃起した陰茎を見て実雄は愕然とした。
「どう？あなたのとは比べものにならないでしょ。これが本当の大人の男のペニスよ」
動揺した様子も無く優里が耳元で囁く。
「ちょ、ちょっと・・・ちょっと待って・・・」
「どうした、なにか問題でもあるのか」
和志はこともなげに言った。
「お前、ひょっとして俺がホモだなんて思ってないだろうな。俺にはそんな趣味ねぇよ」
「で、でも・・・僕は・・・」
「男だって言いたいのか？そんな服着ててよく言うよな」
二人にくすくすと笑われ、実雄は改めて自分の姿を思い出させる。
「まぁお前なら見た目は合格点をやってもいいからな。女に見えなくもないよ。だが、それだけじゃないんだな。俺はこういうのが好きなんだよ」
「・・・こういうの？」
「ドSってことよ」
戸惑っている実雄に優里が答えた。
「お前、身も蓋もねぇよな。だが本当だ。俺は嫌がる女にフェラさせるのが大好きなんだよ」

和志はペニスをピクピクと上下に動かしてみせる。
「でなきゃ、どうして男の前で勃起なんかさせるか」
「で、でも・・・」
なんと説明されても実雄は納得する訳にはいかなかった。
「分かったらさっさと咥えろよ。お前、俺のメイドになるんだろ。メイドといったら性奉仕が基本だろうが」
「い、いやだ・・・」
和志が本気である事を知り、実雄は恐怖にかられた。目の前にあるのは同性のペニスだ。それを自分が口で咥えるなんて想像もしたくなかった。
「ほら、今のあなたは女の子でしょ。ご主人様の命令なんだから、ありがたくしゃぶらせてもらいなさい」
「ここまで来て逃げるつもりか。もうさっきの誓いを忘れたのか」
そういわれても実雄にはまだ男のプライドが残っていた。ＡＶ女優のように言われるまま男のペニスを咥えるだなんて死んでも嫌だった。
「ひょっとして、見た事も無い立派なおちんちんに見とれているのかしら？あまりに自分のと違いすぎるから、これがおちんちんだなんて信じられないんじゃない？」
「ち、違う！」
実雄がたまらず叫ぶ。

「なら咥えなさいよ。夫婦生活で満足させてくれなかったのに加えて、私まで路頭に迷わす気なの？この人でなし！せめてこのくらいの事しなさいよ！」
そうまで言われて、実雄は覚悟を決めた。もう先ほど土下座してあれほどの事を言ってしまったのだ。今更引き返す事も出来ないと自分に言い聞かし、彼はゆっくりと和志のペニスに口を近づける。
「うぅっ・・・」
暑い夏の日に一日穿いたパンツを脱いだ時のような、男性特有のこもった臭気が鼻を突く。男は小便をした後ティッシュで拭かないから臭いのは当たり前だ。
「おっ、やる気になったか」
何度も口を小さく開いたり閉じたりを繰り返しながら、実雄は意を決して唇にペニスの先を押し当てた。
「きゃっ！」
優里が小さく悲鳴を上げる。だがそれは夫が男性のペニスを口にした悲鳴ではなく、歓声に近い物だった。
「よしいいぞ、そのままカリの部分まで咥え込め」
もう一度躊躇すれば、一生出来そうに無かった。実雄は死んだ気になって、言われるまま和志のペニスの先を口内に頬張った。
「んむぅぅぅぅ・・・」

途轍もないほどの臭気が鼻につく。既にカウパーで濡れた粘液が口の中に這い回る気持ち悪さは想像以上だった。女性はどうしてこんな事ができるのか実雄は不思議でならなかったが、もうはき出す訳にもいかなかった。

「いいぞ。そのまま舌先で舐めるんだ。歯を立てたら殺すからな」

「ほら、もっと奥まで挿れなさい」

優里が実雄の後頭部を押す。

「どう？和志さんのちんちん熱くて美味しいでしょ。じっくりと味わうのよ」

その言葉の意味するところを実雄は嫌というほど理解した。追い打ちを掛けるように和志が言う。

「夫婦で一本のものを咥えられるんだ。幸せに思えよ」

やはり優里もこのペニスを咥えてるんだ。こんな気持ち悪い行為を妻もさせられているんだ。実雄は情けなさに包まれながら、不器用に舌を這わす。

「どう、こいつのテクニックは？」

「全然だな。優里と比べるまでもない」

「当たり前でしょ。ほら、もう今のあなたの口は和志さんのチンポ専用性器なんだからね、しっかりと咥えて気持ちよくなってもらう事だけを考えるのよ」

「お前も酷い事言うなぁ、俺も益々勃起してきたぜ」

言葉の通り、和志のペニスはどんどん実雄の口の中で膨張していた。

「もっと転がすように舐めろ」
「ちゅぱちゅぱと音を立てて吸ってみろ」
「今度は玉袋も舐めてもらおうか」
色々と命令をされながら、実雄はそれに従うしか無かった。その行為は三十分以上も続き、もう途中からは味も感じなくなってきた。
「和志さんの凄い持続力でしょ。あなたは三分も持たなかったもんね」
顎があまりにも疲れ果て、もう限界を感じ始めたその時、和志が腰を少し浮かした。
「よし、いいぞ。口の中に出してやるから全部飲むんだぞ」
（い、いやだ！）
拒否しようとした実雄だったが、頭を和志につかまれては逃げる事も出来なかった。
「ほら、もっと激しく頭を振るんだよ。お前だって男だから分かるだろ！」
和志はまるで実雄の口がオナホールでもあるかのように前後に強く振り続けた。頭が揺れ、気を失いそうになりながらも実雄は口をすぼめて和志のペニスを気持ちよくさせ続けなければならなかった。
「んっ！」
次の瞬間、熱いものが実雄の口内に一気に吐き出された。生臭くねちょねちょする、そのあまりの気持ち悪さに実雄は吐きそうになるが、口を奥まで塞がれている為にどうする事も出来なかった。

「ふう、すっきりしたぜ」
ようやく引き抜いた和志のペニスの先から実雄の口に精液が糸を引く。
「うぇぇぇっ！」
それを見て更に気分が悪くなった実雄は口に溜まった精液をエプロンの上に吐いてしまう。
「こら馬鹿メイド！大切なご主人様の精液を吐くなんて何考えてるの！」
優里は実雄のエプロンを持ち上げると、零れた箇所に溜まった精液も舐め取るように厳しく指示する。
「う、うぇぇぇっ・・・」
何度も嘔吐きながらようやく全ての精液を胃の中に納めた実雄に対し、和志が満足したように聞いた。
「どうだ、俺のチンコ美味かったか？」
「・・・・・」
「美味かったかと聞いてるんだ」
「・・・・・は、はい・・・・・とっても美味しかったです・・・」
「そうか、ならまた気が向いたらしゃぶらせてやるよ」
そう言いながら、和志は成功を確信していた。自分から美味しいと言える実雄なら調教は巧くいくに違いない。もちろん例の計画も・・・。
「えぇっ・・・次は私にしゃぶらせてよ。もちろん口じゃなくてもＯＫだから」
「お前、焼きもち焼いてるんじゃねぇだろうな」
「バカね、こんな気持ち悪いオカマと比べないでよ」
優里は軽蔑した目で実雄を見ると、髪の毛を掴んで自分の方を無理矢理向かせた。
「男の癖にちんちんしゃぶるなんて、女装だけじゃなくってホモだなんて驚いたわ」
「そ、そんな・・・酷い・・・」
「んふふ、もう怒り方まで女みたいじゃない。男なら立ち上がって私を殴ってみなさいよ」
「だ、だって・・・」
優里にそう言われても、もうそんな時期はとっくに過ぎており、実雄にはとてもそのような行動に出る気力も無かった。
「そうなのよね、あなたったらずっとこんな感じで流されっぱなし。やっぱりあんたみたいなのは和志さんの女として躾直してもらった方がいいのかもね」
妻にそこまで言われても実雄はうなだれているしか無かった。大体今の精液の付いたメイド服姿では何を言っても滑稽にしかならなかっただろう。
「よし、それじゃあ試験は一応合格ということにしてやる。明日から一生懸命メイドとして奉仕するんだぞ」
和志の言葉が実雄の頭に現実として響く。

「お返事は？」
「は、はい…宜しくお願いします…」
「ホント、こいつもう去勢されたみたい」
「そりゃいい例えだな。本当にしてみるか？」
実雄は青ざめてかぶりを振ったが、それが近いうちに現実になる事をこの時は優里さえ思ってもいなかった。
「それじゃあメイドさん、腹が減ったから食事を作ってもらおうか。聞いたところによると、料理もなかなか巧いそうじゃないか」
「随分私が躾けたからね」
優里が笑って言ったが、この日の為に自分が躾けられたということを実雄は理解出来ていなかった。
「それが終わったら、今度はお前を可愛がってやろうな」
「まぁ、ほんと？嬉しいっ！」
「おい、メイド！料理が終わったらベッドメイクしとけ！」
「あはは、それ笑えるわね。妻の愛人の為にベッドメイクする夫なんて」
「そうだな飯が美味かったら、俺たちの愛の営みをメイドにも見学させてやるか」
台所で野菜を刻みながら、愛人とキスをする寝取り男の様子を実雄はぼんやりとした目で見ているしか無かった。